

Eugene O' Neill の作品に現れた

「白く塗りたる墓」

木 村 俊 夫

(一) 「あーも一度あの若え頃のすばらしい日にもどれたらなあ。あーあの頃はすてきに立派な船があつたつけー雲つくだいような高い帆柱の快走帆船だつたーすてきに屈強な連中がのり組んでいたー海からでも生れて来たような海の子たちだつた。(men that was sons of the sea as if 'twas the mother that bore them.) ……………」

The Harry Ape の第一場で、火夫 Paddy は右の引用にはじまる長い詠嘆を行う。この詠嘆が実は作者 O' Neill その人の考えを一番よく代弁している事には問題はない、と思う。

ついで O' Neill の作中人物の殆んど全ては sense of belonging 乃至は故郷の喪失をその特徴としている。今の Paddy の詠嘆は、會つて人間の belong べき故郷への切ない思慕なのである。併し現実の人間は、今では「空なんぞ見たくも見られねえ鋼鉄のオリに入れられて、まるで動物園の猿そつくり」になつてしまつてゐる。この「猿」の悲劇―作者によれば喜劇―が、戯曲 *The Harry Ape* の内容なのである。

この何にも belong し得ない多くの登場人物、O' Neill の創作手法の研究は、色々の観点から行う事が可能であるが、以下にはその一つの試みとして、O' Neill の作品中に現れて来る「白く塗りたる墓」の motif をとりあげてみ

Eugene O' Neill の作品に現れた「白く塗りたる墓」

Eugene O'Neill の作品に現れた「白く塗られた墓」

たいと思う。本稿でとり扱う作品は、今の *The Harry Abel* それに二つの「黒人劇」*The Emperor Jones* と *All God's Chillun Got Wings* の二篇、及び *Mourning Becomes Electra* である。

(二) O'Neill の作品が一面具体的であり、アリスチックなタッチを濃厚にみせながらも、その同じ作品がしばしば象徴的寓話的に処理され、作品のなう意味が、人生の断片的な事実の描写をはるかに超えて、人生論の公理を提示しようとする傾向を強く持つている事は否定できない。すでに初期の作品においてもこの事は云い得るが、後期に至るに従つて特にこの事はよくあてはまると思う。

今先に引用した Paddy の言葉「鋼鉄のオリに入れられて、まるで動物園の猿そつくり」のみじめな火夫達は、実は「あらゆる文明国の白人種の代表」として登場している。併しこの劇に登場する人物は彼等だけではない。彼等の船には Mildred Douglas 等が乗つてゐる。彼女は「社会の他の半分の人々」の实体を見ようとして今旅の途上にある。つまり人間の半ばは、彼等火夫達によつて代表される人達、別の半ばは Mildred の属する世界の人々なのである。一人の火夫 Long この二種の乃至は二重の人間の対立を社会的な角度から捉えようとするが、それは Yank にも Paddy にもうけられない。つまり作者自身がこの Long の見方をとつてゐるのである。

この劇のはじめに、作者は「この劇のいずれの場面のと扱ひも決して写實的であつてはならない」と指定しているが、オリとも見える「白塗の鋼鉄」に同じこめられた船の火夫部屋のこしらえからはじまつて、以下この鋼鉄なる言葉が特殊な意味をもつてしばしばこの作品中に出て来る事は注意すべき事である。富の追求と虚偽の世界を作者はこの語に託せうとしている。又この作品ではそれにたのみかけて、今魂を失ひ、その形骸のみを仮面につけてゐる「キリスト教徒」達に対するはげしい罵倒を作者が行つてゐる事も、この作品において顯著にみられる事である。この作品ではこの二つが又登場人物 Mildred におつて一体化されてゐるのである。彼女は「ナザレ鋼鉄会社」(Nazareth Steel) の総裁の愛娘である。

③ 「白い」鋼鉄の事はすでにのべた。第二場で舞台は汚ない火夫部屋から、同じ船の遊歩甲板に移る。「この場の与える印象はすべてが美しく、生き生きした海の生活のそれである」に拘らず、その中に「周囲と不釣合な細工めいた二人の姿が、生気なく不調和にならんでいる。」これが Mildred とその付添いの伯母なのである。Mildred の方は「彼女の父祖の活力が、彼女の胎内に宿る前にかれてしまつたとみえて、その生き生きした精力の発露ではなく、単にその精力がそれ自体を消耗して作りあげた人工的なもの、顯現にすぎないといつた風」な「ぼつそりした華奢なからだつきの二十才の娘で、その蒼白い顔は人を馬鹿にしたような高慢ちきな表情で損われている。」「いらだたしげで、神經質で不平家で、いつも自分の貧血症をもてあましている様子」と O'Neill はくわしく描写しているが、彼女自身に「あたしに元氣も純真さもないようだわ。そういうものはすつかり、あたしが生れる前に、あたしの先祖の血の中から燃えつきてしまつたんだわ。お祖父さまの熔鉦炉は炎を空まで吐いて、鋼鉄をとかし、数百万の富をおつくりになつた―それからお父さまは、うけついで家の火を燃しつづけられて、さらに数百万の富をおつくりになつたのだわ―そして、その一番びりつこに、このちつぽけなあたしが、ちよこんといひるのよ。あたしはベッセマ式製鋼法の無用な産物だわ―数百万の富のようにね。いえ、むしろ、あたしは副産物の後天的特徴である富をうけついで、それをつくつた鉦鉄の精力や力は何一つうけついでいやしないのよ。競馬場の言葉を借りると、あたしの父は黄金だわ。そして、あたしは黄金に呪われているんだわ―それも一通りの呪われ方じゃなくてね」とも「豹が自分の皮膚の斑がいやだつて不平を云つたりしたら、却つておかしなものね、咽喉を鳴らすがいわ、小さな豹。咽喉を鳴らし、爪でひつかき、引き裂き、殺してお腹一杯食べて、幸福にしているがいわ―ただ、お前は密林の中になくちやいけないのよ。そこではお前の皮膚の斑が、却つて偽装になるのだからね。だけど、オリの中では、それだけお前が目立つて見えるのよ」とも語らせている。この娘の服装がすつかり白づくめなのである。今最後の引用は勿論「エテオピヤ人その膚をかへうるか豹そのまだらをかへうるか、もしこれをなし得ば悪に慣れたる汝らも善をなし得べし」(Jeremiah 13:23) を映しているが、又こ

の白く Mildred の姿には「汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども内は死人の骨とさまさまのけがれとに満ち……」(Matthew 23:29) が含蓄されている事はまぎれもない。

この場は彼女と伯母との罵り合いに終始するが、その応酬の内、伯母の「ホワイトチャペルが、あなたに必要な神経の強壯剤を提供してくれるといいがね」なる語にも、単にロンドンの貧民街への言及以上の作者の意図が察せられる。やがて汽灌室を見学に降りて行こうとする Mildred は、汚い所へ行くのだから服装を代えるように乞われるが「いいのよ、白い服はどつきりあるのよ。」「こんな服は五十着からあるの。あたし戻ってきたら、これは海へ捨てるつもりよ。……」と答える。

第三場、汽灌室に現れた Mildred もこの場の異様な光景一獣のように自分に向つて来そうな Yank をみて遂に失神してしまふが、Mildred に「ぢやらして獣……」と罵られ、呆然としている Yank にも、「白い幽霊」のような娘の姿が頭にこびりついてしまふ。以後、Yank は考えこみはじめる。またまらぬ彼の頭にはこの「白い幽霊」がつきまとつてはなれない。火夫達にとりかこまれてゐる時にも(四場)、Long に伴われて Mildred への復讐に町に現れた時にも(五場)、又獄につながれてゐる時にも(六場)、又遂に動物園のゴリラのオリの前で、ゴリラに長々と訴えかける時にも(八場)、つまり Yank がゴリラにしめ殺されてしまふまで、異常なしつこさでこれは彼につきまとう。

Yank の幸福は彼が考えこまない先にあつた。彼がまだ「白い幽霊」をみぬ前に、彼が自信をもつて「俺は鋼鉄だぞ」と喚く事のできた時にあつた。白い鋼鉄は自然人 Yank を追いやつて遂にゴリラにしめ殺させてしまふ。しかも「鋼鉄」自身は現実の世界を支配しながら、今は唯外側が「白く塗られた」だけのぬげがらなのである。そして豹は密林の中にある時にもその皮膚の斑が偽装の役目を果してくる。この「白い」「密林」が「鋼鉄」の世界、表皮だけの人間の集団―社会なのであつて、内にある孤独の猿はそれに圧殺されたのである。

四 「汝らは白く塗りたる墓に似たり」を作品中にとりいれた例はこれまでの他の作家にもなくはないが、オニールの

この作品は右にのべた如く、これがきわめて入念に計算されかつ効果的に処理されている。もうもうと石炭のちりのたちこめ、煙にはまつ赤な炎が燃えたち、ごうごうとした騒音の中にたち彷彿く「獣」遼と、その場に現われる「白い」 Mildred の対照はきわめてはげしい印象をあたえる。

この同じ「白く塗りたる墓」は、又この作品のみならず後の Mourning Becomes Electra の中に再びはつきり現れて来る。

第一部第一幕冒頭に出て来る Mannon 家は舞台では次のようである。

「舞台を左右に一杯に、六本の高い円柱のある白塗のギリシヤ神殿風の玄闕。屋敷の左隅、馬車道の端れの芝生に大きな松の樹一本。その幹は黒い円柱をなし、玄闕の白い円柱と著しい対照をなす。……柔い入り日の光が屋敷の前面を照らし、白い玄闕とその奥の灰色の石壁の上にキラキラと霧のように震えている。そのために円柱の白さ、壁のくすんだ灰色、開いた鐵戸の緑、芝生と植込みの緑、松の樹の黒と緑が一層際立つ。白い円柱がその奥の灰色の壁に黒い影を投じている。一階の窓が無念ににらみつけるように日の光をてりかえしている。神殿風の玄闕は、陰気な灰色の醜さをかくすために屋敷にかぶせた不調和な白い仮面のように見える。」

幕が進むにつれてこの家の外観も内に住む人々の争闘も益々陰惨の度を加えて行く。

そして三部終幕に Lavinia は Mannon 家最後の人となつて自らをこの「死の家」の中にとじこめてしまふ。この家に住む人々の意識にもこれははつきり反映している。 Christine は

「家を留守にして歸つて来るたびに家がまるで墓場のように見えて来る。バイブルの白く塗られた墓場―清教徒の醜い灰色の上にかぶせた仮面のような異教徒のお寺の入口。こんなげものみたいなものを建てるなんてお父様らしいよ―憎しみの神殿。」

と語るし、戦さから歸つて来た主の Mannon は

Eugene O'Neill の作品に現れた「白く塗りたる墓」

「家のものは日曜に白塗の教会堂へ行つて死について冥想した。生とは死ぬ事だつた。生れるという事は死の準備であつた。死が生れて来るということであつた。(頭の混乱にこだわつて頭を横に振り振り) どうしてこんなつまらんとを思いついたんじやろう。白壁の教会堂のせいじや。きれいに洗い清めた白塗の—死の殿堂—そんなような気がした。しかし今度の戦争では、数多の白壁が血しどきをあげているのを見た。汚水にも等しい血じや。投げ捨てる壁芥も同様に、人間が投げ出されるのを見た。白塗の教会堂などはなんの意味もなくなつてしまつた—死がどうのこうのと真面目くさつて騒いだりして。」

以上二つの作品の物語りは非常に異つたものを持つている。にも拘らずこの二つにみられる顯著な共通点が今の「白く仮面」である。

O'Neil の試みた仮面劇全体については今はあまりふれなうが、実は上記二つの作品も、その O'Neil の試みた仮面劇の系列に立つものである。Mourning Becomes Electra が現在吾々の読んでゐる形のものとなるまでには、この作品が一度は本当の仮面劇になりかけた」といふべきなのは O'Neil 自身の手記 (Working Notes and Extracts from a Fragmentary Diary, B. H. Clark ed.: Euro pean Theories of the Drama 所載参照) をみれば明らかである。又 *The Hairy Ape* なるほど脚本自体は仮面劇とはなつてゐないが、一九二二年にこれが上演された時には仮面劇となつてゐる。原存脚本には、いづれも、人物に仮面をつけさせてゐないに拘らず、これ等が仮面劇の構想を持つてゐる事は、更に O'Neil 自身が後に明言してゐる。(Memoranda on Masks, The American Spectator Year Book 1932 所載参照)

作者が描こうとしてゐるものは、ともすれば人が日常性の面の後ろに忘れがちな、「背後の人生」である。人物に仮面をつける事によつて、作者がその背後の生を覗こうとしてゐるのである。本稿でのべてゐる白く鋼鉄—Mildred なり、

白い屋敷は、これ等仮面の人々をとり囲む世界が、それ自体の虚妄をかくす仮面となつてゐるのである。それは人物達の仮面をつけた姿と相反映しあうものである。

⑤ 次に *The Emperor Jones* と *All God's Chillun God* 『Wings』の二つの黒人劇についてのごよふと思う。*O'Neill* の作品中に黒人が登場するのは他にもあるし、それに短篇ながら *The Dreamy Kid* は黒人を主人公とする作品である。これ等の内、作者の代表作の中に数えられる右の二つの中に、今問題としてゐる「白く塗りたる墓」の反映をうかがう事ができるのである。

表面的な筋だけみれば、一は無頼の一黒人がアメリカから西インド諸島中のある島に逃れ、そこでも奸智を働かせて土人達の皇帝になり上るが、遂に土人達によつて復讐をうける物語りであり、一は黒人の一青年が白人の女と結婚し、弁護士試験をうけて立身を志すが、みじめな挫折に至る物語りであつて、その意味では両作ともまぎれもない「黒人劇」である。併しそれは唯表面的にみた場合だけの事。更に少し詳しくこの作品をみてみると、作者がこの二作を狭い黒人劇のわくをはみ出した劇としても構想してゐる事がうかがわれる。同時に又、黒人の黒、白人の白が特殊の意味を持つて来る。

まず *The Emperor Jones* をみよう。冒頭の *Jones* の宮殿のこしらえをみるとすでに「白」がめだつ。壁には白色塗料がぬつてある。「床は白のタイルばり」玄關にも「白い柱」が立つてゐる。この舞台での「白」の強調は、先にみた *Mourning Becomes Electra* におけるほどではないが、意味のないものとして見すこすわけには行かない。これには黒人 *Jones* の「白」への信仰、鞏下の土人達への脅迫の意図がこめられてゐるとみたり。

この作品には *Smithers* なる白人のもぐり商人がでて来るが、この「臆病」「陰険」な「こそ泥」の *Smithers* に對して、*Jones* は「十年間一等寝台車のボーイをやつてゐる内に、「白人の旦那方」の話をきいて、こそ泥の方はおそかれ早かれ監獄にぶちこまれるが、大泥棒の方は「皇帝にかつぎあげられ、くたばると『名譽の殿堂』へ祭りあげら

Eugene O'Neill の作品に現れた「白く塗りたる墓」

れる」事実をおぼえてしまった。彼が今この島の皇帝におさまっているのも、彼がうまく機会をつかまえて右の経験を生かしたからである。Jones は白人 Smithers を圧倒し、あなどりきついている。しかも彼自身アメリカで汽車のボーイをしていた頃はバプテスト教会の「信者」であつた。併し Jones は Smithers にこうつぶく。

「黒ん坊どもが黒を白と信じてると知つたら、おれはそれにちげえねえつて、奴らより大声でどなりたててやるんだよなあ、おれがバプテスト教会のために伝道してみたつて、一文にもなりやしねえ。おれは金が目当てなんだ。だから当分はエスさまもおあずけだ。」

彼は色こそ黒いが、その考え方、やり口は全く「Yankee」式である。彼は土人達へのこけおどしに、自分は銀の弾丸でしか死なないと彼等に云いふらし、身の安全を計る。白いこしらえの彼の宮殿と同じくこの銀の弾丸も又、「白い仮面」なのである。併しこのこけおどしは相手の土人達に対してだけなされたものではない。Jones 自身が、この白い色をした「銀の弾丸」への異常な迷信にとりつかれる事となる。彼はやがて森ににげこむ。二場で、森の入口に現われた Jones は、かねてこの事あるを予想して、食糧を此所にかくしておいたが、その目印にしておいた「白い石」を探す。併しどうしたわけか、まわりにも沢山似たような白い石があつて、それに迷い、遂に彼はくだんの「白い石」をさがりあてることができない。「白い石、白い石、おめえはどこにいらんだ！」Jones はうろたえはじめ。場の進むにつれて彼は森をさ迷い、様々の幻覚になやまされるが、四場では、「囚人」Jones は白人の看守に、「やい殺してやろぞ、この白い悪魔め、これを最後に殺してくれろぞ！」とわめいて、ピストルをはなつ等。彼自身が異常に「白」に憑かれている。森をさまよひぬき、最後にたのみとした銀の弾丸をもうちつくして、今又元の所にまい戻つた Jones は土人達の手にかかつてみじめな最期をとげる。

以上の諸作品、いずれも所謂「表現主義」のわくの中に入れて考えられる作品ばかりである。併し作者自身は外国にあつたこの運動の影響を否定して、Georg Kaiser の *From morning to midnight* などは、自分が *The Hairy Ape*

を書きあげて後ほじめて知つた」と断言する。(Barrett H. Clark: *Eugene O'Neill, The Man and His Plays* (revised version 1947) p. 83) 「表現主義」論議は今の問題ではなく。注目したのは、O'Neill が右の断言に結びつけて、「*The Hairy Ape* は *The Emperor Jones* の直系子孫である」と告げている事である。それぞれ独立した二つの作品に相異もあるのは当然の事であるが、同時に又この二つの作品がその構成において甚だ相似た型を持っている事を見逃すわけには行かない。ゴリラと握手を求めぬ獣のような白人と、「ヤンキー」の奸智を身につけた黒人の「遁走譜」二つは共に密林の中に行われる。一は「現実」の西印度のある島の森の中に「幻覚」を見る。他は「豹」を「偽装」してくれる密林と「象徴」された都会を「現実」に彷徨する。そしてこの二つの作品の中に吾々は又同じ「白く塗られたる墓」のモチーフを見出すのである。Jones は *The Hairy Ape* において意味されたと同じ仮面の「白」の世界に憧れ、はめつする。*The Emperor Jones* に現われる「Yankee」の世界への痛罵についてもすでに少しふれておいたが、この作品の終結も皮肉である。一つ所でどん／＼大鼓を叩くままで、Jones を狩り出し得るともみえなかつた土人達は又、Jones のこけおどしを信じて本当に銀貨をつぶして「銀の弾丸」を作る愚かさであるが、結局勝利はこれ等土人達の側にあつた。「あきれた間ぬけ共」と彼等をさき笑つてゐた Smithers の予想は見事にはずれてしまふ。

(因) 次に *All God's Chillun Got Wings* について述べるが、ついで乍ら、この作品と *The Hairy Ape* との中間に發表された *The Fountain* の中にも又、「白人」の偽瞞を痛罵している一節があるので、紹介しておこう。七場、Florida の岸辺に泳ぎつゝいた Nanno は土人達にこう語る。

「……あいつ等(スペイン人)、顔の色こそ白いが、悪い奴等じや、矢も通らんようなシャツを着てある。火をふいて人を殺めるような妙な棒も持つてある。あいつ等が強いのは悪魔のおかげじや。けれど本当の武士じやない。泥棒したり女をひどい目にあわしたりはしあるが。……あいつ等の神はたかが土の一つよ。これじや! (と云つて酋長のつけている金の戴章にさわる。) ……あいつ等の見るものはただ物ばかり、物のうしろにある魂はわからん。心根は鹿のふみ

Eugene O'Neill の作品に現れた「白く塗られたる墓」

Eugene O'Neill の作品に現れた「白く塗りたる墓」

あらした水溜みたいに汚いわい……」尙も話は、十字架にかけられたキリストの事に及んで、黄金魔に仕える「スペイン人」達への罵倒は続く。

(出) 人が White である、と云われる時、それはその人が白人である事を意味する事もあり、又その人が精神的に、innocent, pure, honorable, trustworthy, virtuous, honest 等の属性を持つ事を意味する事もある。何も特別の用例でもなら判りきつた事であるが、但しこの意味の二様性の生みだす irony がこれから見ようとする *All God's Children Got Wings* の中では殊更に強調され、その irony がやがて「白く塗りたる墓」の意味をおびて来るのである。

一幕一場の冒頭に作者はこんな指示を与えている。「黒人、白人達が通りすぎる。黒人達は気持よく春の気にとけこんでいる。併し白人達の笑は不自然で、その自然の感情もごちない」と。一面リアスチクでもあるこの作品は、早くも此所に、あらかじめ設定された意味に従つて登場人物をおどらせる O'Neillらしい手法を見せはじめ。そしてこれ以後の舞台での黒人、白人の配置はともりリアスチクとは云えないものである。Jim は白人 Ella と仲よしで、チヨークをのみこんでまで白くなろうとする子供である。そしてやや長じては、まだ法律の勉強を続けて白人なみの地位をつかもうとする。だから Mickey は彼を嘲つて云う。「白人になろうなんて思いやがつたつて、そうはうまく行かねえぞ。」(一幕二場)併し Ella はともかく、この作品に出て来る白人達は、実は皆よた者ばかりである。そしてそれと対照的に黒人の Jim がまじめな青年なのである。よた者の白人に弄ばれ、今は失意の底につきおとされた Ella には、Jim だけが「この世でたつた一人の誠実 (white) な人」で、よた者達は「みんな悪者 (black) — 性根まで悪者」と思える。(一幕三場) Jim と結ばれる彼女は Jim に「貴方は私に誠実だつたわ」と云つて彼の手をとる。Ella を得て Jim は「そうだ、そうだ、僕達人間が人間扱ひしてもらえる国へ出かけよう——差別なんかしない国へ——みんな親切で、皮膚の下にかくれている魂の判る人ばかりの国へ……」と喜ぶ。(一幕三場)併し結婚式をあげた二人を教会も

人々も祝福してくれはしない。黒いみなりの Jim、白いみなりの Ella が教会からはき出されるが、黒白に分れて列を作る人々の憎々しげな目は、この二人に集中する。彼等ににらみさえられてこの列の間を通りすぎる Jim はもう少しでくずおれてしまうほどに圧倒される。虚勢をはつて彼は希望、喜びの気持をのべはするが。(一幕四場) 二人の間はうまく行かない。母親も云うように「白人と黒人はあんなにびつたり一緒になつてはいけない」のであつて、「白人だけの歩く道と黒人だけの歩く道とは別々」なのかも知れない。夫を愛しながらも、彼を試験に通させまいと願う Ella に Jim の姉 Hattie は、その気持こそ「白人の正義 (white justice)」「白人の優越感を守るための恐怖」であるとはげしくくつてかかる。併しそんなに云われる Ella がまだ Jim に「貴方こそ一番誠実な人 (the whitest of the white)」と告げる気持も又うそではないのである。(二幕一場) 狂つて行く Ella を Jim は尙も愛し、あくまで彼女をはずさないとする。彼は「黒人と云われたつてかまわない。一番の白人 (the whitest of the white) とも呼んでもらおう。唯彼女にはもう僕だけしかないのだ。僕にも彼女しかないのだ」から、姉なんかの云う「黒人種、白人種のわけへだてなど全くのよた話」と思いたい。(二幕二場) たがやはり狂気の Ella には、黒ん坊のくせに「白人ぶつて試験なんかうける夫」がたまらない。妻のあまりの狂乱に Jim も「この女の白い悪魔め (You white devil woman)」と叫んでしまう。そして狂気と絶望のはてに追いやられた二人は、最後に又もや昔しの子供時代に戻つて、Ella は顔に靴ずみをぬつて黒ん坊になり、Jim がチョークをぬつて白人になつて、おはじきをしようと言ひ合う。(二幕三場)

黒と白のとり扱いをめぐつての作品の大筋を辿つてみたが、この実は「白人」でもなく、全くの「黒人」でもない主人公の物語りは、これを吾々が象徴としてうけとらない限り、大分無理な所のある作品である。今のと論点こそいささか異なるが、Skinner もこの作品の「人物を象徴として」うけとらねばならぬ事を述べてゐる。(R. D. Skinner: *Eugene O'Neill, A Poet's Quest* 1935 N. Y. p. 131)

さきほどの Jones と今の Jim と、その人となりはかなり大きな違いを見せつつ、こけおどしの「白」を畏怖しあ

Eugene O'Neill の作品に現れた「白く塗りたる墓」

Eugene O'Neill の作品に現れた「白く塗りたる墓」

こがれる「黒人」であるという一点は全く同じである。しかも *ironical* な意味を持つのは「白」だけではない、当然「黒」にも同じ意味の陰影が生れて来る。Hattie が弟の結婚プレゼントに贈ったコンゴ土人の仮面（グロテスクな顔で、みる人の心に何か漠とした意味のある思いをさせるが、真に宗教的な靈感をうけてすばらしく見事につくられたもの）がある。これは彼女の言葉でも説明されるように、故郷アフリカの人々が宗教儀式に被つたもので、すばらしい出来ばえで、まあ白人世界での Michael Angelo のもののように、真の芸術家によつて作られた真の芸術作品なのである。この土人の仮面が Ella をさいなみ、恐れしめる。狂つた彼女は遂に卓の上にこれをおいて、ナイフの一突きをくれてしまう。併し「黒」の象徴はこの末だ「白」に染まない土人の仮面だけではない。この仮面のおかれたと同じ部屋に、今一つ、ごつい金の額縁にはめて、色付の安ピカな写真がかかつている。「有能な鋭敏な顔はしているが、異様な特殊結社の徽章、勲章、果草で飾りたてたいでたちをして、飾り縁のついた馬形帽をかぶつた中老の黒人の肖像」がこれである。吾々はこれにあの皇帝 Jones の飾を見出す。Ella を、社会的地位を、「白」をあこがれる Jim、「白」に染み、「白」に脅迫され、憑かれた「黒」がこれに象徴されている事は明白である。そしてこの「白」と「黒」の対比の観点にたつ場合、当然細かな性格の陰影において異なる Mildred と Ella に、又 Yank と、特に Jones と Jim に作者がある連鎖を持たせている事を吾々ははつきり知るのである。

(4) 前掲 Skinner の書の巻頭につけた O'Neill の作品の創作年表でみると、それらの作品が完成されたのは、*The Emperor Jones* が一九二〇年秋、*The Hairy Ape* が一九二一年秋、*All God's Chillun Got Wings* が一九二三年秋となつていて、その時期がかなり接近している。やがて本格的に「仮面劇」の世界に入つて行こうとする O'Neill はすでに例えば *The Fountain* においても仮面をもち出し、*Welded* において「間」と「仮面のような表情」を人物に指定したりして彼の進んで行く方向を示したのであるが、その頃又、右の如くしきりに「白く塗られたる墓」の主題で様々の交奏曲を試みたという事はまことに興味が深い。因にこの「白」と「黒」の相剋、その結果としての両者の消耗

は、後の *The Great God Brown* 中の Dion と Brown に O'Neill がさまざま二つの塗質の相剋と消耗とにつながるものである。同じ motif を持ちながら *Mourning Becomes Electra* だけが、その完成が一九三一年と前三作より少しは遅れているが、その間に O'Neill は *Desire Under the Stars*, *Marco Millions*, *Great God Brown*, *Strange Interlude* の時代を通過したのである。作品の色合にもかなり違つたものが生れて来ているのもこのためと云わずける。ともあれ、右のように、「白く塗りたる墓」の作品への反映を検討してみた場合にも、作者がごく入念な構成をたて、しかもその結果が効果的でもあつた事を知り得た。併しかく入念に構成された反面、リアリズムが著しく後退して行つた事も指摘される。「白」の意味する現実はいかじめ設定されてある。人物は設定されて動かぬものの中で、唯意識を内にめりこませて行くばかりである。彼等の心理は「行動」とはつながらない。強力な Yank は全身の力をこめて人につき当つてみるが、はねかえされてしまう。森の中をさまよふ Jones の持つ幻覚は森の外で待ちうけている土人達や Snithers には関係がなす。唯「噂」だけを残して、Mannon 家の人々は全滅し、最後に一人生き残つた Lavinia も生きながら「白く塗りたる墓」の中へ身をかくしてしまふ。そして *All Gods Chillun Got Wings* は結局、「黒人劇」から人が期待しがちな「現実」の課題追求を稀薄にされて、Jim と Ella は個人性のうすい抽象化された人形になつて行く。

併し O'Neill 自身はそういう批評に従つて、彼自身がみつめようとする「世界」から目をそらす事を承服しない人であつた。本稿の目的は唯、彼が、「仮面劇」以前に「仮面劇」を、……人物の顔につける仮面の他に別な仮面をも設定したという事実、又古典に仮託して創作を試みる傾向の強い作者が、聖句「白く塗りたる墓」を土台にしても、大よそ右のような作品群を吾々に残してくれたという事実を指摘すれば足るのである。(この項終り)